

みみタロウ

日本語版 ☆ 135号 2020年4月

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」
 大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海2F

Tel/Fax : 077-523-5646

E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp

URL : http://www.s-i-a.or.jp

Facebook : https://www.facebook.com/siabiwako



そこく か はし 祖国との懸け橋に

今回みみタロウは、インドネシア人のムハマッド・ラムダンさん（愛荘町在住）にお話しを伺いました。



2001年、技能実習生として初めて来日し、以来、日本は私にとって特別な国となりました。研修先は彦根のプラスチック加工工場。

そこで妻となる人との

出会いがあり、日本人と結婚しました。日本語を県内の日本語教室で学び、4年間夜勤の仕事をした後、帰国してフリーで通訳業を始めました。様々な日系企業で通訳をしましたが、非常に専門性の高い通訳を求められることもあって勉強の必要性を痛感し、大学で日本語と経営管理を学びました。卒業後は日系企業に就職し、様々な部署で働きました。当時は「お前はプロだろ。プロらしくやれ！」とよく叱られましたが、今は、それが私を育てる言葉だったとわかります。8年後に再び来日し、3年間、協同組合で実習生の受け入れ業務に携わりました。そしてこれまでの経験を元に、昨年、祖国と日本の架け橋になりたいという思いでインドネシアにある職業訓練校の日本支部を滋賀に立ち上げました。私自身、技能実習生になるまでは、建築の作業現場などで働いていましたが、日本語との出会いから道が開け、知識が広がり、今の自分があります。

インドネシアと日本の文化は随分異なりますが、まず感じるのは、人との付き合い方の違いです。日本人は人との距離を少しずつ縮めていきますが、私の国では初対面でも友達になったりします。家も日本のように「内と外」がはっきりしているのではなく、家に入れば家族同然で、誰が勝手に冷蔵庫を開けても気にしません。それに遠い親族も大きな家族なので、毎週末のようにあちこちで結婚式が

行われ、5百人、千人と集まります。妻も最初は「あの人もこの人も親戚なの!？」と驚いていましたが、そんな彼女もインドネシアの言葉や文化を学び、私の家族にも溶け込んでくれました。

また宗教については、私たちイスラム教徒は、断食やハラール食品、お祈りなどの戒律を守って暮らしています。しかし実際、それをそのまま日本で行うのには難しい面があり、融通をきかせたり、理解を求めたりすることが大切だと考えています。肌を人に見せることもタブーの一つですが、私も初めて他の人とお風呂に入ることになった時には驚いた末、日本文化に従うことにしました。また、せっかくの職場の歓迎会などで食べられないものがあつたり、お酒を飲んだり注いだりもできないので、周りの人に申し訳なく思うこともあります。今、多くの同胞が異文化の中でストレスを抱えながら滋賀で暮らしています。どうにもならないことも多く、私は彼らの話を聞くぐらいしかできないのですが、その中で語られる一番の悩みは礼拝についてです。私たちは礼拝をすることで心身が清められ、安らかな気持ちになる大切なものですが、実際、職場で行うには無理があるので休憩時間に行うようアドバイスをしています。また、会社側が私たちの文化に配慮してくださるところもあって、とても喜んでるんですよ。私たちの思う当たり前はあたり前でないかもしれせん。ですから日本の人には、気になるところがあればすぐに遠慮なく言っていただき、改善していきたいと思っています。

私の目下の夢は、インドネシア人やイスラムの人々が交流し、癒しの時を持てる場を滋賀に作ることです。地域の人々の理解を得ながら、多くの仲間の夢を叶えたいです。

